「元永本古今和歌集」における割り書きについての一考察

石丸真弥
ISHIMARU Shinya

本作は、「元永本古今和歌集」における割り書きを取り入れて制作した作品である。

はじめに、「元永本古今和歌集」の概要を示しておこう。「元永本古今和歌集」は『古今和歌集』の現存最古の完本で、上冊の末尾にある「元永三年（一一二〇）七月廿四日」の奥書にちなんで「元永本」の名前で呼ばれる。綴葉装による上下二冊の冊子本で、仮名序とともに本文二十巻すべてが書写されている。残念ながら真名序は書写されていない。筆者は古来より源俊頼〈一〇五五―一一二九〉と伝えられてきたが、今日では、飯島春敬氏（『書芸』六・1～6「元永本古今集に就いて」）・小松茂美氏（『元永本古今和歌集の研究』）の研究により、「三蹟」の一人・藤原行成〈九七二―一〇二七〉を祖とする世尊寺家四代目の藤原定実〈～一〇七七―一一一九～〉を筆者とするのが定説である。料紙は、日本製の唐紙が用いられており、表面は、木版による雲母摺り・空摺りよって、唐草文・花襷文・七宝文・亀甲文などの十五種類の文様がある。ただし、東京国立博物館における近年の調査で、重ね唐草文と小重唐草文は同一ではないかとの見解も出たことが恵美千鶴子氏（「元永本古今和歌集の魅力とその伝来について」『墨』二六五号、芸術新聞社、二〇二〇年）によって報告されている。裏面は、金銀の切箔、砂子、芒などを撒いた染紙で華麗に装飾されている。紫、赤、緑、黄、茶、白など色とりどりで、濃から淡、淡から濃へと色を連ねるように用いられている。本紙寸法は二一・一×一五・五cm。書風は、初代行成や父である三代目の藤原伊房〈一〇三〇―一〇九六〉を基礎としながらも、四代目としての独自性を打ち出しており、その縦長でスマートな書風は瀟麗であって韻致が深い。直筆と側筆を上手く使いわけ、あえて伊房の書風を彷彿させるような書きぶりをしている部分もある。書式においては、連綿、散らし書き、はなち書き、割り

書きを巧みに行い、千変万化の書法を尽くしている。漢字と仮名の調和や散らし書きの多様性が特に素晴らしい。また、草仮名を駆使するなど使用字母数は歴代随一で、漢文的配字や『万葉集』の表記を彷彿させる当て字（覧・藍・南・鴨・鞆など）、片仮名ワの原字を用いるといった表現も試みている。六代目の藤原伊行（〜一一四九―一一七五）が著した『夜鶴庭訓抄』の「さうし書様」には、

まづひきひろぐるはしより書べし。……ての様々を一帖がうちにみせてかゝるべし。やう〳〵といふはいろはかき。さうみだれたるさまかへて書べし。……

（『群書類従』）

とあり、「元永本古今和歌集」においてもその故実を垣間見ることができ、書作と書論が合致していると言える。定実筆の基準作例の中でも、極めて意欲的な作品である。もと、加賀前田家伝来で、三井高大氏の遺志によって東京国立博物館に寄贈され、現在は国宝に指定されている。

次に、「元永本古今和歌集」における割り書きについて整理しておこう。まず、先行研究については、散らし書きについて論じているものは多数あるが、この割り書きについて詳細に論じているものはほぼ無いと思われる。名称については、割字書（『飯島春敬全集第七巻平安五』書藝文化新社）、割り書き（『古筆辞典』・『古筆の鑑賞』・『古筆大辞典』春名好重著）、割り書・割書（『笹舟かな教室基礎下』桑田笹舟著）などがある。春名好重氏の『古筆大辞典』（淡交社）の「わりがき・割り書き」の項では、

一行書くところに、文字を小さくして、二行並べてかくこと、双行ともいう。割り書きの注は割注という。漢籍や注経の本文は文字を大きく書いているが、注は小さい文字で二行に並べて書いている。それ故本文と注とをはっきり区別することができる。伝藤原佐理筆『筋切』は和歌の書写に割り書きをしている。「はるのきる霞のころもぬきをうすみ（やまかぜに）こそみだるべら（なれ）」「はるのよのやみはあや（なしむめの花色こそみえね）香（やはかく）る、」などと書いているのは割り書きである。二行に書く歌を一行に書くため割り書きにしたのである。……

と説明し、「天治本万葉集（仁和寺切）」・「平等院切」の書き方についても割り書き・割り書きと同じような書き方という見解を示している。藤原定家筆「伊達家本古今和歌集・仮名序」、「嘉禄二年本古今和歌集」や伝頓阿筆「古今和歌集・仮名序」では割注を確認する

ことができる。「元永本古今和歌集」にある割り書きは次の通りである。

【上冊】

巻第一

いろもかも（以呂毛加乍於奈無可）（おなじむかし志）（にさくらめどゝ）しふる人（ぞあらた所）（利介）まりける…Ⓐ　57　①

巻第四

やまざとはあきこそ（佐）（ことにわびし介）（けれしかのなく可）ねさましつ（ねにめを祢二）□…Ⓐ　214　②

【下冊】

巻第十一

かゞり火にあらぬものからなぞも（可利尓毛可）

かくなみだのかはにうきてらん…Ⓑ　529　③

あけたてばせみのをりはへなきくら（介多弖三能利奈支）

しよるはほたるのもえこそ（夜八本多）（れわた多）…Ⓑ　543　④

巻第十二

きみこふるなみだのとこにみちぬ（支三多尓美地）

ればみをつくしとぞわれは（礼者所和者）（なり利）ぬる…Ⓑ　567　⑤

あきのゝにさゝわけしあさのそ（支能尓佐和介悪散能）

でよりもあはでこしよぞ（利所）（ひちまさり万利）（ける類）…Ⓑ　622　⑥

君が名もわが名もたてじ津の（毛可多天乃）

国のみつともいふな（以布）（あひきとも悲支）（いはじ者）…Ⓑ　649　⑦

巻第十四

おほぬさのひくてあまたになり（於能久弖多尓利）

ぬればおもへどえこそたのま（礼者）（介介ざり利）（けれ多）…Ⓑ　706　⑧

すまのうらにしほやくけぶり風を（万能志保介利）

いたみおもはぬかたに（伊多於尓）（たなび多）（きにけり二介利）…Ⓑ　708　⑨

たまかづらはふ木あまたに（堂末可徒者不阿多尓）

なりぬればたえぬ心の（李者盈能）（うれし礼）（げもなし介）…Ⓑ　709　⑩

たがさとによがれをしてかほとゝ（堂可散可礼乎香本）

ぎすたゞこゝにしも（支数多古二）（ねたる年多）（こゑする）…Ⓑ　710　⑪

あかでむなかはをだに（阿可天）（おもは八）（なめそ）（こそ）（れがたみに）（ぬるを）（わかれ可）（のちのわす者）（礼可三尓多尓）…Ⓐ　717　⑫

巻第十三

わたつみとあれにしとこをいまさ（和多都美礼尓越意）
らにはらはゞそでや（良尓者弓支）（あはとうき無）（なむ）…Ⓑ　733 ⑬

あふまでのかたみもわれはなに（可者二）
せむにみてもこゝろのなぐさ（能奈尓）（まな）（くに）…Ⓑ　744 ⑭

巻第十五

すまのあまのしほやきころもをさ（春万能保越）
をあらみまどほにあれやきみが（乎阿美度尓）（可）（きま）（さぬ）…Ⓑ　758 ⑮

巻第十六

ちのなみだおちてぞたぎつし（千能見多於所）
らかはゝきみがよまでのなに（可八可能奈尔）（こそ）（あり）（利）けれ…Ⓑ　830 ⑯

巻第十七

たまだれのこがめはいづらこゆる（堂可）
ぎのいそのなみわけおきに（以所三介於支尔）（いで）（介利）（尓）（けり）…Ⓑ　874 ⑰

あかなくにまだきもつきのかくるゝ（可堂支能）
か山のはにげていれず（歟葉尔介以礼数）（もあら）（無）（なむ）…Ⓑ　884 ⑱

おしてるや（於天）なにはのうみに（尔本能可）（介可）（利）（尓）
やくしほのから（やくしほのから）くも（われはおいに）（介可）（利）（尓）（以尓）（けるかな）…Ⓐ　894 ⑲

とゞめあへずむべも年とはいは（免須无以者）
れけり鹿もつれなく過るよ（禮介利毛奈）（か）（鹿は八る）…Ⓑ　898 ⑳

おいぬとてなどてわが身をせめぎ（於王可勢支）
けむおいずは今日に（无於意尔）（毛）（あはまし）（可）（もの）（か）…Ⓑ　903 ㉑

巻第二十

さゝのくま（散能）（ひのくま）（乃）（天之者之川可）（可者耳）（はにこ）（美）（まとめてしばしみづか）へよ（部与）…Ⓐ　1080 ㉒

以上、全部で二十二首（Ⓐ五首・Ⓑ十七首）の割り書きがあることが分かり、大別すると、Ⓐの歌一首一行書きの途中や末尾に二行で小さく書くものと、Ⓑの歌一首二行書きで二行目の末尾もしくは末尾直前に二行で小さく書くもの（『飯島春敬全集』第七巻平安五では、Ⓐのみを割字書として記載し、Ⓑについては一つも記載されていない。春名好重氏の『古筆大辞典』・『古筆辞典』・『古筆の鑑賞』も同様。）の二つに分類することができる。この特殊な割り書きは、同筆である「巻子本古今和歌集」、「筋切・通切」でも使用されており、富岡美術館蔵の「巻子本古今和歌集」断簡には、

巻第十九

人こふることをおもにと（おもひても）（あふごなき）こそ

わびしかり（れけ）　1058

というふうに、Ⓐと Ⓑを組み合わせたような割り書きを見ることができる。また、「筋切・通切」では、本文での使用以外に仮名序の中の小野小町の歌にも割り書きを確認することができる。（『仮名名跡集成筋切（古今集）上』・興文社、『日本名筆全集』平安時代篇第四期巻五・社団法人書芸文化院）なお、「元永本古今和歌集」・「巻子本古今和歌集」の仮名序の同じ部分については、割り書きではなく、本文と同じ大きさで書かれている。割り書きが歌の部分でのみ使用されていることは、注目すべき点である。

仮名序

おもひつゝぬればや人のみえつらん夢と知（せば）

さめざらまじを

わびぬればよをうきくさの根を絶て（さそふ人水／あらばいな）

むとぞおもふ

「わびぬれば」の歌に関しては、左頁の最終行で割り書きをしたものの、収まりきらず、「むとぞおもふ」は次頁の一行目に書いている。「元永本古今和歌集」においては、基本的には左頁の最終行でⒶの割り書きをすることが多いが、Ⓑの割り書きは右頁にもあり、⑨・⑩・⑪のように連続して使用している箇所もある。これらから、割り書きは単なる行末に収めるためだけの処理的な書式ではなく、多様な表現を求め、美を意識した書式であると考察する。

あくまで私の推測の域を出ないが、歌一首を割り書きする表現方法は、割注を含む「北山抄・巻第三」（拾遺雑抄上）・「北山抄・巻第七」（都省雑事）の校合をした定実ならではの着想ではないかと考える。（藤原伊房筆「藍紙本万葉集」にも割注の箇所がある。）また、この割り書きが「元永本古今和歌集」、「巻子本古今和歌集」、「筋切・通切」で使用されていることは、書風が同筆以外での共通事項でもあり、筆者が定実であることの裏付けの一つとして、新たに加えることが可能ではないだろうか。

前述の内容を踏まえた上で、半切に大字仮名で『新古今和歌集』の藤原家隆〈一一五八―一二三七〉の歌一首を割り書きの書式で制作した。今回は、Ⓐの①・⑲の割り書きを基本とした。半切に割り書きするため、歌を決める際には、なるべく漢字を多く使用できるものを選んだ。「元永本古今和歌集」で使用されている漢字や連綿を集字し、「吉」・「野」・「川」・「岸」・「山」・「吹」・「桜」など頻出

する漢字も参考にしながら、漢字と仮名との調和を図った。定実の書風を形成する要素となる縦の流れを意識し、線質の変化に留意した。料紙は、「元永本古今和歌集」で使用されている日本製の唐紙の文様（獅子二重丸文）に近いものを選んだ。「元永本古今和歌集」における割り書きという特殊な表現に着目し、古典に立脚する型を取り入れた大字仮名の表現を試みることができた。

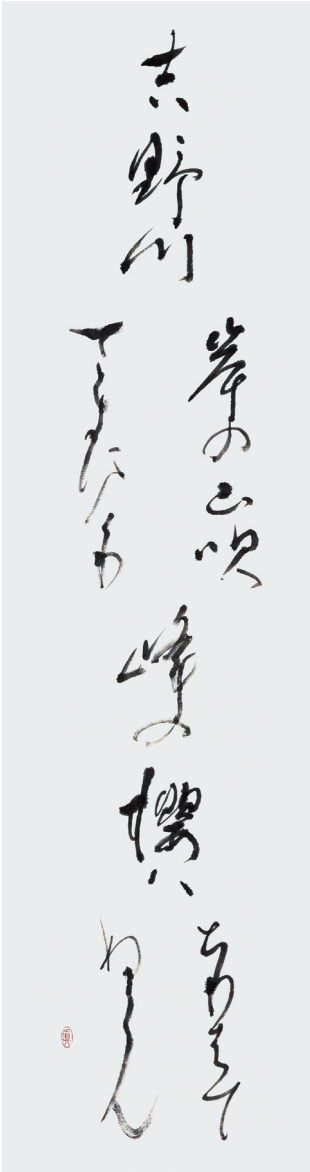
今後は他の古筆や近現代の仮名作品においても割り書きがないか調査・整理し、漢籍等の割注との関係も含め研究を深めていきたい。

【出典】

『新古今和歌集』巻第二　春歌下158

『新編日本古典文学全集43新古今和歌集』

校注・訳者 峯村文人　小学館



吉野川岸の山吹さきにけり峰の桜はちりはてぬらむ

135×35㎝